

令和 4 年度
福島県 集落自主活動に係る伴走支援事業

喜多方市高郷町本村地区業務実施報告書

獨協大学ほんそんみらいプロジェクト

[目次]

1. はじめに	1
2. 喜多方市高郷町本村地区の概要と課題	1
3. 今年度の活動実績と評価	4
3-1. フットパスの整備	
3-2. 記念樹植栽	
3-3. “Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”における福島県復興支援物産展の開催	
3-4. オンライン・ミーティングの実施	
3-5. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告	
4. 次年度の活動計画案	8
4-1. フットパスルートの充実化	
4-2. マップづくり	
4-3. 田植え体験	
4-4. 本村地区の魅力発信	
5. おわりに	11

1. はじめに

獨協大学ほんそんみらいプロジェクトは、2018 年度に獨協大学地域活性化プロジェクト大坪チームとして「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に採択された。その後 2020 年度には、ほんそんみらいプロジェクトへチーム名を変更し「大学生等による地域づくり支援事業」に採択されて、コロナ禍においても活動を続けてきた。2022 年度は通算 5 年目となるが、枠組みも変わって「集落自主活動に係る伴走支援事業」の 2 年目であった。

1 年目の 2018 年度には実態調査を行い、集落に足を運び、少子高齢化に直面していることを肌で感じた。豊富な自然を活かしていないことが課題だと感じた。2 年目の 2019 年度は実証実験として、自然を活かすための方策である「フットパス」を試験的に実施した。3 年目の 2020 年度はコロナウイルスの影響で、本村地区の方々とのオンラインでのミーティング(LINE や Zoom)を中心に行った。4 年目の 2021 年度は、現地活動やオンラインでの講演会や交流会を実施した。

5 年目となる 2022 年度のメンバーは、小山健司(経営学科 4 年:代表)、堀田唯茉(経営学科 4 年:副代表)、白井里奈(国際環境経済学科 4 年:会計)、吉田華(経営学科 2 年)、丹野悠太(国際環境経済学科 2 年)、猪爪麻衣子(フランス語学科卒)、窪谷ちひろ(英語学科卒)、清野芽生(フランス語学科卒)、宮本圭(国際環境経済学科卒)、飯田佳暖(フランス語学科卒)から構成される在学生 5 名・卒業生 5 名の合計 10 名である。

今年度はまず、11 月 19 日(土)・20 日(日)の日程で現地活動を実施した。昨年度まで継続してきたフットパスに関するルートの整備や看板作成などをした他、記念樹植栽という新たな試みも行った。なお今回の現地活動に当たり、2022 年 8 月に発生した東北豪雨により喜多方市の濁川に掛かる鉄橋が崩落した影響で、磐越西線「喜多方～山都」間が運休(2023 年 3 月現在もいまだ運休)となっていた。これを受け、会津若松駅まで電車で向かい、そこから喜多方市役所地域振興課・猪俣健二氏に送迎していただいた。また、この他に現地活動には、本村地区の人を交えて全 3 回にわたり LINE や Zoom を用いたオンライン・ミーティングを開催した。さらに 12 月 12 日(月)～16 日(金)には、獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”に参加して地域振興応援物産展を開催した。以下の 2 節以降では、本年度の活動報告と評価、次年度の活動計画について述べる。

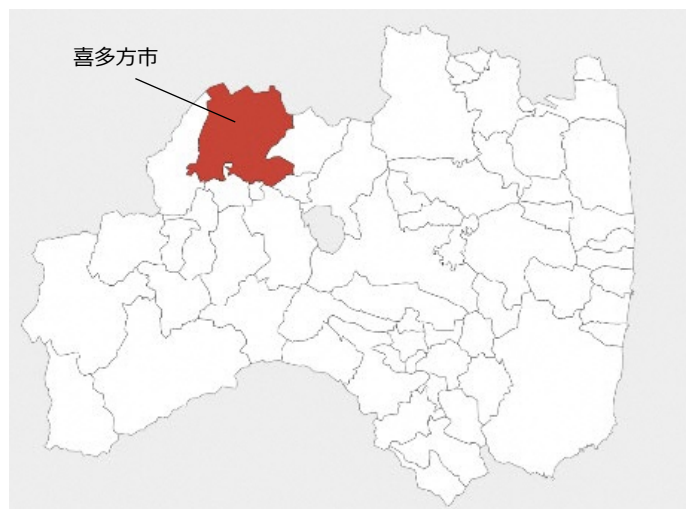
2. 喜多方市高郷町本村地区の概要と課題

高郷町本村地区が所在する喜多方市は、図表 1 から分かる通り、福島県の北西部、会津盆地の北側に位置している。その中で、本村地区は喜多方駅から 16km、車で約 30 分の場所に所在する。2022 年現在、人口は 38 人、高齢化率 55.5%であり、地区の 2 人に 1 人が高齢者となっている。標高は約 300m で、一級河川の深山川沿いに集落が密集している。また、主要産業は農業で稲作やそばの生産が盛んである。さらには、山間地のため棚田が多いといった特徴もある。

本村地区はもともと高郷町の行政区の 1 つだった。2006 年に、喜多方市・熱塩加納村・

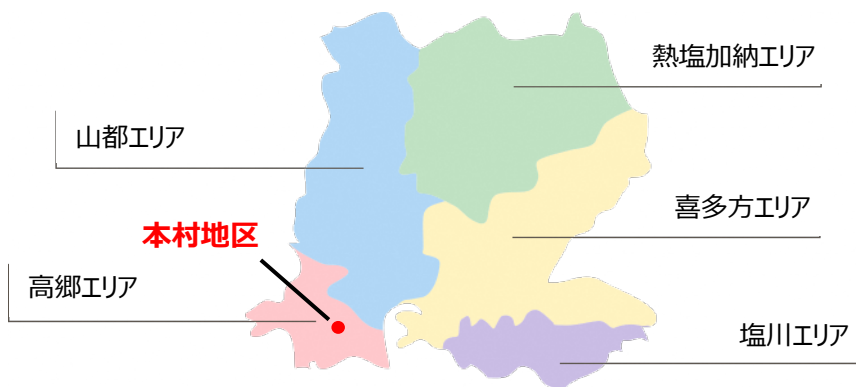
塩川町・山都町が合併したことで、現在の高郷町に変更された。図表 2 が現在の喜多方市の新たな行政区分である。図表 1・2 は現在の喜多方市や本村地区の所在を表している。

図表 1. 喜多方市の所在地



[出典]白地図ぬりぬり「福島県地図」(以下の URL)
(<https://n.freemap.jp/tp/Fukushima>)より筆者作成。

図表 2. 喜多方市のエリア区分と本村地区の所在地

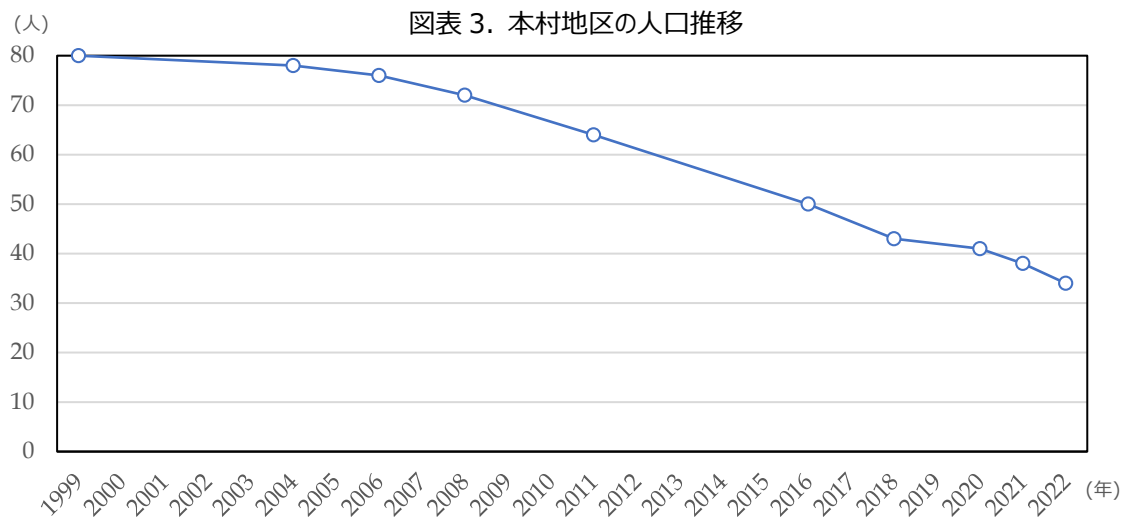


[出典]マイナビ農業「喜多方」(以下の URL)
(<https://agri.mynavi.jp/kitakata/>)より筆者作成

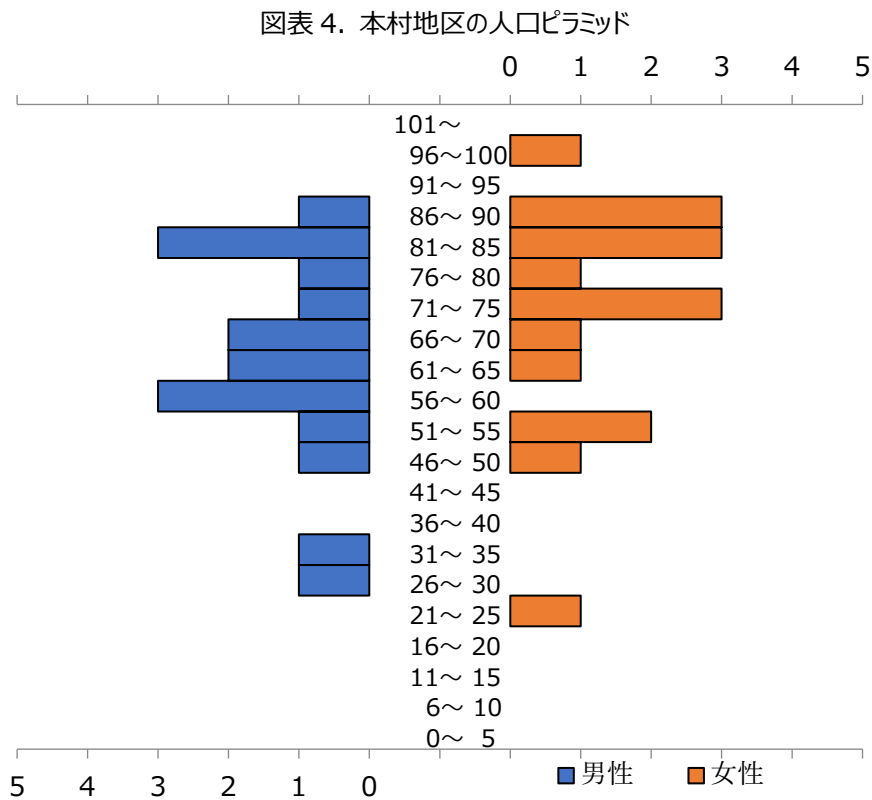
本村地区における最大の問題は、急速な人口減少が進んでいることと、高齢化率が高いことである。高齢化率は、2018年に51%(43人中22人)、2020年に51%(41人中21人)、2022年に62%(34人中21人)となっており、高齢化率はすでに60%を超えている。その他にも、働き世代の減少による労働者不足や、市町村合併による行政支援の縮小、耕作放棄地の増加、コロナによるコミュニケーション機会の減少が課題であると考えられる。

図表 3 は、本村地区の人口推移を表したものである。本村地区の人口は年々減少傾向にあ

ることが読み取れる。1999～2022年のおよそ20年間で人口は80人から34人へと半分以下に減少していることがわかる。また、1999～2008年までの約10年間は10人ほどの減少だが、2008～2018年の10年間は倍の20人ほど減少しており、人口減少が加速していることが深刻である。



[出典]2021年12月時点の「本村住民基本台帳」に本村地区物江浩二氏からいただいた情報を加味して2022年12月時点のデータまで筆者作成。



[出典]2021年12月時点の「本村住民基本台帳」に本村地区物江浩二氏からいただいた情報を加味して2022年12月時点のものを筆者作成。

こうした課題を踏まえ本村地区で何か自分たちが力になれないかと考え、活動している。3節では今年度の活動報告とその評価を行う。

3. 今年度の活動実績と評価

3-1. フットパスの整備

今年度は、2022年11月19日(土)・20日(日)に現地活動を行うことができた。今回の現地活動では、在学生である白井・堀田・丹野・吉田4名、卒業生である窪谷(OG)・宮本(OB)・飯田(OG)3名の計7名が参加した。詳しい行程表は図表5の通りである。

図表 5. 現地活動行程表

時程	行程
11月19日(土)	
11:00～11:57	JR 東北新幹線 やまびこ 57号(盛岡行) 大宮駅発～郡山駅着
12:15～13:20	JR 磐越西線快速(会津若松行) 郡山駅発～会津若松
13:30～14:30	駅着
14:45～15:00	送迎車で本村地区まで移動 (対応：喜多方市役所・猪俣氏)
15:30～16:30	物江さんの自宅にて自己紹介・アイスブレイク
16:30～18:00	フットパスに関する看板作成・のぼり旗の設置
18:30～20:00	フットパスコースの確認(翌日に向けた下見含む)
20:30～21:00	物江さんの自宅にて夕食
22:00	翌日に向けたミーティング 就寝(物江さんの自宅)
11月20日(日)	
7:00	起床
8:00～9:00	朝食
9:30～11:30	フットパスイベントの開催 (本村地区の方々とコース散策)
12:00～13:30	昼食(おむすび・芋煮会)
14:00～15:00	送迎車で会津若松駅まで移動 (対応：喜多方市役所・猪俣氏)
15:30～16:35	JR 磐越西線快速(郡山行) 会津若松駅発～郡山駅着
17:06～18:00	JR 東北新幹線 やまびこ 66号(東京行)

[出典]筆者作成。

活動を行うにあたって、事前に PCR 検査を受け手から現地活動に入るなど万全な対策をすることを心掛けた。昨年度は行きのバスで渋滞にはまり時間が押してしまったこともあり、今回は新幹線での移動とした。前回同様、対面での顔合わせが初めてのメンバーがいたため、自己紹介から入り顔合わせを行った。

アイスブレイクの後には、フットパスコース散策に向かった。コース内には未だに足場が不安定な場所や傾斜がきつい場所があったが、普段から自然と向き合っている地区の方たちに支えられながらなんとか歩くことができた。足場が不安定な場所をどうすれば安全に歩くことができるのかが課題として残る。2日目には、フットパスコースに設置予定の看板制作を行った(写真 1・2 参照)。前日にフットパスコースを散策したこともあり、フットパスイベントに参加することがどうしたらフットパスを楽しんでもらえるのかをよく考えながら、看板づくりに励んだ。これまでフットパスコースの整備や看板・のぼり旗の制作などフットパスの実施に向け準備を進めてきたが、多くの方々に参加してもらい、フットパスを通じて本村の魅力が伝わるようなものにできるよう、今後もフットパスの実施に向け準備に取り組んでいきたい。

写真 1. 看板制作の様子①



写真 2. 看板制作の様子②



3-2. 記念樹植栽

OG・OB 在学生別にそれぞれブルーベリー、ライラック、ハナミズキの 3 本の記念樹を植栽した(写真 3・4 参照)。日頃から自然と触れあっている地区の方の手際の良さに驚きながらも、無事に植栽を終えることができた。長い年月を経て成長する記念樹の成長を見ることが本村に行く楽しみのひとつとなった。在学生、卒業生含め、中々本村に行くことはできないが、今回植栽した記念樹の存在が本村との繋がりを持たせてくれる意味となったと感じた。

写真 3. 記念樹植栽の様子①



写真 4. 記念樹植栽の様子②



3-3. “Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”における福島県復興支援物産展の開催

「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2022”」とは、本学で6月と12月の年に2回開催されるイベントで、「環境と開発を両立させて、持続可能な社会を創る」というテーマに沿って、参加団体を募集して参加団体が企画を実施するという本学の公式イベントである。今年度12月12日～17日に開催された「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”」において、「大学生と集落の協働による集落復興支援事業」で活動する4グループが合同で「福島県復興支援物産展」を開催し、本村地区からはお米を出品し、約10kgのお米を集落の方と協働して販売した(図表6参照)(写真5・6参照)。

図表 6. “Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”における「福島県復興支援物産展」の開催

活動概要	集落の方が手作りした本村産のお米を販売し、本村のPRを行った。 商品のお米は1合当たり100円で、さまざまな量で販売した。
結果 (売れた個数)	1合：18袋 2合：19袋 3合：18袋 5合：2袋 売上12,000円
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・本村PRリーフレットを作成し配布する。 ・販売する商品の種類を増やす。 ・累計での記録ではなく、1日あたりの記録を取る。

写真 5. 学内販売での様子

写真 6. 学学生センター北側販売風景



今回は販売場所を 2 か所に分散させたことや、事前に大学付近のマンションにポスティングした効果もあって、学生だけでなく学外から足を運んでくださった方がおり、無事に用意していたお米を売り切ることができた。学生や職員だけでなく、一般の方など多くのお客様に手に取っていただき、少しでも本村について知ってもらえる良い機会となった。

しかし、前年度の反省においてリーフレットの作成があったにも関わらず、今回作成することができず、説明の際に学生だけではどうしても本村の魅力について伝えきれない部分が出てきてしまった。次年度にはリーフレットの作成・配布をし、より多くの方に本村の魅力が伝わるように工夫していきたい。また、今回物産展に参加し、多くの改善点を見つけることができたため、今回の反省を活かし次の物産展はより良いものとなるように工夫していきたい。

3-4. オンライン・ミーティングの実施

現地活動以前以後、本村地区の人々と情報交換をはかることを目的に、オンライン・ミーティングを 8/10、9/26、11/7、1/17、2/7、2/21 の 6 回開催した。現役生だけでなく、OB・OG も参加していることが特徴になっている。活動の感想や反省点だけでなく、近況などのたわいもない話も交え、集落間との交流を図った。ミーティングの詳細は、図表 7 の通りである。

図表 7. オンライン・ミーティングの詳細

日付	議論内容	参加者
2022 年 8 月 10 日(水)	今年度活動案の議論	学生 1 名、OB 1 名、現地の方 1 名(計 3 名)
2022 年 9 月 26 日(月)	新メンバーとの顔合わせ	学生 3 名、現地の方 1 名
2022 年 11 月 7 日(月)	現地活動の詳細決め	学生 1 名、現地の方 1 名
2023 年 1 月 17 日(火)	今年度の活動の反省	学生 3 名、OB・OG 3 名、現地の方 4 名(計 10 名)
2023 年 2 月 7 日(火)	次年度の活動方針決め	学生 1 名、OB・OG 3 名、現地の方 2 名(計 6 名)
2023 年 2 月 21 日(火)	福島県報告会の報告	学生 2 名、OB・OG 4 名、現地の方 1 名(計 7 名)

なかなか現地へ行くことができない分、オンラインで議論を深め、現地活動に入った際にやりたいことを発揮できるような機会にしていきたい。

3-5. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告

2023年2月11日(土)には、福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告へ参加した(写真7参照)。新型コロナウイルスの影響もあり、少人数での参加となり、4年の小山と2年の丹野が代表として参加した。3分という短時間の発表であったが、大学生事業に参加するすべてのグループの活動報告を聴くことができ、ほんそのの事業にも活かしていきたいと思える活動もたくさんあった。また交流会では他のグループとの交流もできて、大いに刺激をもらった。

写真7. 福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告の様子



4. 次年度の活動計画案

4-1. フットパスルートの充実化

今年度も例年通り現地を訪れた際に、フットパスを行った。今回はフットパスを行った後に、フットパスコースに設置する看板の作成を行った。写真8・9は、作成した看板である。フットパスコースの「スタート」や「ゴール」地点に設置する看板や「何キロ地点であるか」などを示した看板なども作成した。次年度も新たなフットパスコースに合わせたデザインの看板を作成しようと考えている。

写真 8. 作成したフットパスの看板①



写真 9. 作成したフットパスの看板②



また、次年度はフットパスをさらに充実させるために、コース内の途中に本村の魅力を伝えるなどの工夫を入れてパワーアップさせ用途考えている。

1つ目は、フットパスのコースの途中にテーブルや椅子などの休憩スポットの設置である。今回歩いたコースは、自然の山の中を上るコースであった。山の上付近にはとても景色がきれいなポイントがあり、そこで一息つき景色をさらに楽しんでもらうために休憩スポットとして、テーブルや椅子などを作成する予定である。

2つ目は本村紹介看板の設置である。従来のフットパスでも、本村の自然の魅力を感じることができるがさらに魅力を伝えるために、本村を紹介した看板を設置しようと考えている。また、ただ本村の魅力を看板で伝えるのではなく、QRコードを看板に書き入れ、スマートフォン等で読み取ると、本村の紹介動画が流れるような仕組みを考えている。動画は、住民や学生、OB・OGに協力をし、ユーモアのある紹介動画を撮って行きたいと考えている。

4-2. マップづくり

4-1で述べたフットパスも含め、本村全体のマップづくりにも取り組む予定である。マップには、フットパスのコースを実際に歩いて、きれいであった景色の写真を学生自身が撮るなどをして、マップづくりに関わっていきたい。また、本村に訪れた人とマッチングできる仕組みを取り入れるためにオンライン販売を掛け合わせた仕組みを考えている。フットパスの看板の紹介動画と同様に、マップにQRコードをつけ、読み取ると本村のお米や野菜などをオンラインで購入できるというものである。オンライン販売以外にも、マップをマップとしての役割で終えることなく、何にかしらの付加価値をつけ、本村とつながることができる、マッチングできるような仕組みを考え実施していきたい。

4-3. 田植え体験

今年度は、現地活動を行った11月19日(土)・20日(日)とは別日に、お米の収穫感謝祭に参加する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの影響により、11月23日(水)に本村単独で収穫感謝祭が行われることになってしまった。本村単独で開催された収穫感謝祭で

とれたお米は、本学で行われた“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”の物産展で販売した。次年度は、今年度参加できなかった、収穫感謝祭への参加に加え、田植え体験にも学生、OB・OGが参加し、地域の人との交流をさらに深めていきたいと考えている。

4-4. 本村地区の魅力発信

次年度は、本村地区での活動はもちろん、さらに多くの人に本村の魅力を知ってもらいつながりをつくるために、本村地区の魅力発信に力を入れていきたいと考えている。

(1) “Earth Week Dokkyo”での物産展開催

例年、本学で行われている Earth Week Dokkyo では、物産展として本村の色々な商品を販売している。今年度は本村でとれたお米「本村米フレンド」を販売した。この物産展では、福島県の他の地域も販売しており、他のチームは1種類ではなく、複数の商品を販売していた。次年度は、本村チームも他チームに習い、本村のお米だけでなく、野菜や2021年度の Earth Week Dokkyo 2021～Winter～で販売していた「そば蒸しパン」のど本村の特産物を活用した商品なども販売していきたい。また、販売場所に関しても、今年度は始め、学生センター横での販売を行っており、学生に目につきにくい場所であったので、次年度は学食前や学生センター入り口など販売場所、方法なども工夫していきたい。

(2) SNSの活用

次年度は、SNSを利用した魅力発信にもさらに力を入れていきたい。現在、Instagram「ほんそんみらいプロジェクト」で本村の魅力を発信している。写真9、10はそのInstagramアカウント「ほんそんみらいプロジェクト」の写真とある投稿の写真である。現在は、このアカウントはOBの方が所持しており、動かしており、本村の日常の様子や学生が現地を訪れた際の様子が投稿されている。

写真 9. 「ほんそんみらいプロジェクト」Instagram アカウント



写真 10. Instagram による投稿



Instagram では、今までは投稿のみが行われていたが、今後はリール動画やストーリーなどでさらにリアルな本村の日常などを多くの人に知ってもらい、魅力を発信していきたい。リール動画では、本村がどのような場所かを紹介したり、どんな人がいるか、活動している様子を写真ではなく動画としていきたいと考えている。本村地区での活動様子だけでなく Earth Week Dokkyo で物産展を開いているなどもストーリーで上げるなどもしていきたい。また、日常の投稿だけでなく、本村で行われるイベントの告知なども行っていきたい。

5. おわりに

今年度は事業開始から 5 年目となり、昨年度に引き続き福島県の皆様、大学の職員の皆様、先生方のご協力のもと活動することができた。昨年度はコロナウイルスの影響により、現地とオンラインのハイブリッドで活動を行った。今年度も同様に Zoom や LINE 電話でのオンラインによるミーティングと 11 月に現地での活動、大学での活動になった。今年度は 1 回しか現地で活動することができなかったが、次年度は今年度よりも多く現地で活動を行っていきたい。

次年度以降の課題として挙げられるのは、活動や関係性の継承・活動の幅を広げる等である。今年度は現地に行く回数が少なかったため、次年度は多く行き、活動の幅を広げたい。また、新型コロナウイルスの影響で行けないような場合には物産展への参加なども考えて活発に行っていきたい。

謝辞

喜多方市集落支援員物江浩二様には、昨年度に引き続き自宅に泊めていただき、私たちの現地活動にご指導いただきました。また奥様のさとみ様にも自宅に泊めていただき、おいしい食事をたくさんご馳走になりました。大変お世話になり、ありがとうございました。また、喜多方市高郷町本村地区区長の貝沼邦博様にも私たちの活動にご支援をいただきました。その他、福島県地域振興課ならびに社会システム株式会社の皆様をはじめ活動を支援してくださったすべての方に、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。